全日本クラブ野球

箕島球友会 準優勝

決勝延長、高島ク（滋賀）に惜敗

第37回全日本クラブ野球選手権大会（毎日新聞社、日本野球連盟主催）で10日の決勝に勝ち進んだ和歌山箕島球友会は、同じ近畿勢の滋賀・高島ベースボールクラブ（滋賀）に延長十回タイブレークの末、惜しくも敗れ6年ぶり2回目の優勝はならなかった。しかし、選手たちは改めて全国レベルの実力を見せつけ、黒川弘勝投手(25)が敢闘賞を受賞した。【竹内望】

準決勝で逆転勝利し、勢いに乗って迎えた決勝。互いに譲らず、1死満塁からのタイブレークによる延長に突入した。箕島は十回、俊足の1番、山下龍二選手が二塁に高いバウンドのゴロを放ち全速力で駆け抜けたがダブルプレー。その裏、力尽きた。

「県民の方に良い報告がしたかった。春先からこの大会で優勝し、社会人野球日本選手権に出場することを目標にしていたが、相手投手が良かった」。悔しがる西川忠宏監督(51)だが、一方で主力の黒川、三宅悠両投手に加え、宮迫清二投手が好投し「来年に向けて大きな好材料を得た」とも。今春入団した宮迫投手は「直球が145キロを超えるなど力がついてきた」といい「打力を強化すれば、都市対抗でも実業団チームに対抗できる」と次を見据える。

延長の末、惜しくも破れ悔しさをにじませる和歌山箕島球友会の選手たち＝埼玉・西武ドームで

4番で大会打率3割7分5厘とチームをけん引した藤田和大主将(25)も「悔しい思いだけ。八回表のチャンスで打てなかった。しかし、一人一人成長し、決勝はみんな楽しんでのびのびプレーしていた」。原井和也ヘッドコーチ(44)も「選手が試合を積み重ねる中で、たくましくなっていく姿が見えた」と話す。敢闘賞を受賞した黒川投手は「(受賞は)優勝できなかったので、素直に喜べない。大会通して、ある程度思い通りに投げられた。ここ一番の集中力を磨いていかなければならない」とさらなるレベルアップを期す。

試合後、チームは午後7時前にバスで西武ドームを出発。翌朝から仕事の選手も多く、松源箕島店で惣菜を担当する黒川投手も「バスが着き次第、仕事です」。

全日本クラブ野球 総評

高島クと箕島球友会

抜きんでた守備力

10日閉幕した社会人野球の第37回全日本クラブ選手権は、決勝で滋賀・高島ク（滋賀）が和歌山箕島球友会（和歌山）を破り、初出場初優勝した。

決勝に進出した両チームは、守備力で抜きんでていた。滋賀・高島クは10年、OBC高島（滋賀）を退いた伊藤監督と選手を中心に創部。選手の雇用などでOBC時代の地元スポンサー企業の支援を受け、強化を進めた。選手は19人。人口5万人余の高島市にOBCと併存する中、地域貢献とチーム支援をいかに維持、拡大するかが今後の課題だ。

和歌山箕島球友会は地元のスーパーマーケットチェーンとその関係会社などがバックアップ。さらに公営球場の指定管理者となることで練習時間、場所を確保し、地元密着を強く打ち出している。4強の所沢グリーンク（埼玉）、全足利ク（栃木）もしっかりとした支援体制を持つ。

有力視された4チームが順当に勝ち上がったことは、クラブ野球のレベルアップとともにチーム間の実力差の拡大の表れ。有力クラブは企業チームに肩を並べることが目標となるだろう。一方、クラブ同士の切磋琢磨（せっさたくま）がモチベーションとなるチームも多く、多角的な強化・振興策が求められる。【藤倉聡子】